

研究会・シンポジウム報告

2015年11月4日(水) 定例研究会報告

テーマ： 日越国際交流研究会〔日本の歴史と文化〕における発表報告
～日本の伝統工芸品産業の経験とベトナム～

報告者： 樋口博美所員(本学人間科学部教授)

解題： 嶋根克己所員(本学人間科学部教授)

司会： 大矢根淳所員(本学人間科学部教授)

時間： 17:00～18:30

場所： 社研生田会議室

参加者数：10名

報告内容概要

社研とベトナム社会科学院(VASS)東北アジア研究所とは国際交流組織間協定を締結し、活発な交流を重ねている。今年度は、樋口所員がハノイの同研究所を訪れた際に、日越国際交流研究会で登壇して報告した。この度の社研定例研究会は、まずは、嶋根所員に、この数年の社研-VASS等、両研究機関交流の履歴を解題していただき、次いで、樋口所員に報告をお願いした。

◇11/4の社研定例研究会での報告内容

本定例研究会では、今年9月3日～9日に渡ってVASS東北アジア研究所にて開催された集中講義「歴史と文化」のなかで「工芸と祭礼にみる日本の伝統技能と文化の継承」と題して行った講義内容の一部を報告するとともに、講義後のディスカッションのなかでベトナムの研究者たちから出た質問について整理、何が論点となったのかを提示し、そこから見えてくるベトナムの現状と問題についての報告を行った。ベトナムでの研究会の内容は以下の通りである。

◇日越国際交流研究会の概要

現地研究会では、日本各地に存在する「伝統的工芸品産業」について、特に高度経済成長期以降から現在におけるまで、日本社会の産業構造の変化や価値観の変化のなかで、人々がこの「伝統的な、小さくなりゆく産業」をどのように社会や生活の中に位置づけてきたのか、どのような社会関係やしくみのなかで継承されてきたのかを報告した。

その後ベトナム研究者から出された質問・意見の数々は、近年のめざましい経済成長の背後におけるベトナム固有の文化や伝統に対する関心の高まりがうかがえるものであった。たとえば、日本ではなぜ伝統産業の見直しが行われたのか、国内需要が存在し続けるのはなぜか、また伝統的工芸品産業は経済的側面と文化的側面のどちらが重視されているのか、といった質問内容が形を変えて繰り返されるなど自国の現状と将来に照らし合わせつつ追究しようとする姿勢が強く感じられた。現在ベトナム国内で整理の進む(たとえばベトナムにおける工芸品村の指定は、村内35%～40%の世帯がその産業に従事していること、家庭所得の50%を越えていることが条件とされている)伝統産業の存続とそれに対する支援に絡んで、日本ではどの程度国からの支援があるのか、実際の技能継承がどのように行われているのか、といった具体的、施策的なことに関わる熱心な質疑応答が多かったことも印象的であった。

記：専修大学人間科学部・樋口博美・大矢根淳